鮎走村由緒書

粟田口大納言平朝臣光盛卿
御家臣芥見左小弁様
御　直　庄　安元二年　庄司判
（一一七五年）
美濃國郡上郡鮎走村
由緒書
宝暦二年八月十日　庄屋　惣左衛門判
組頭　甚五右衛門判

四人明の初

岩穴とは岩に非ずして人の通なきをいう哉。

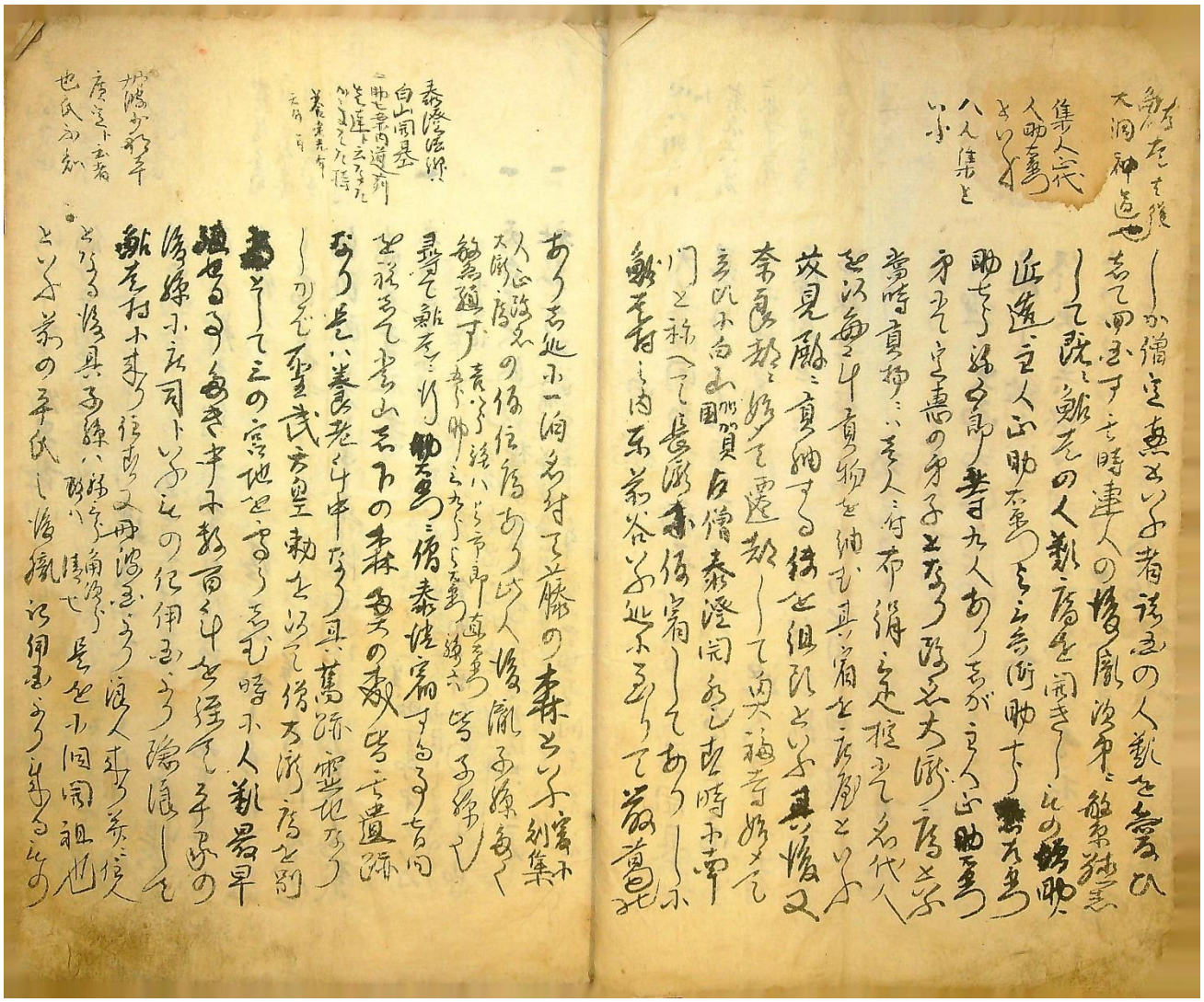
連人は性槁氏たつしんの子孫、俗性を何というか。後の森氏ならん。

鮎走其後
大洞・神道也。

集人正代人助右
衛門といふ。
八人集といふ。

泰澄法師ハ白山開
基
助七案内道刈先達
ト云。なたかまに
そだ持
養老壱年
六月一日

丹波少将平広定
ト云者也。
氏不知

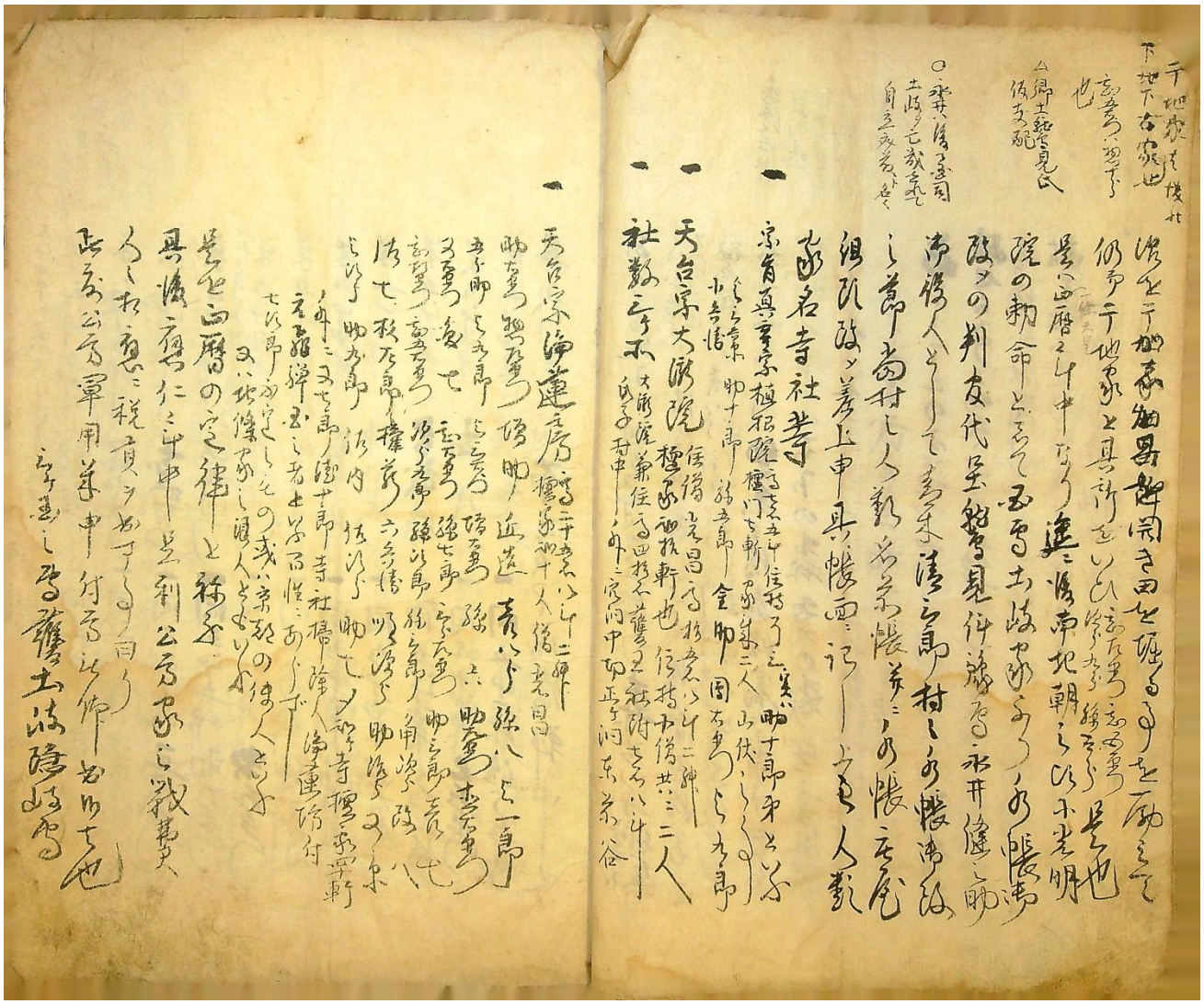


干地家は後の下地下古家也。

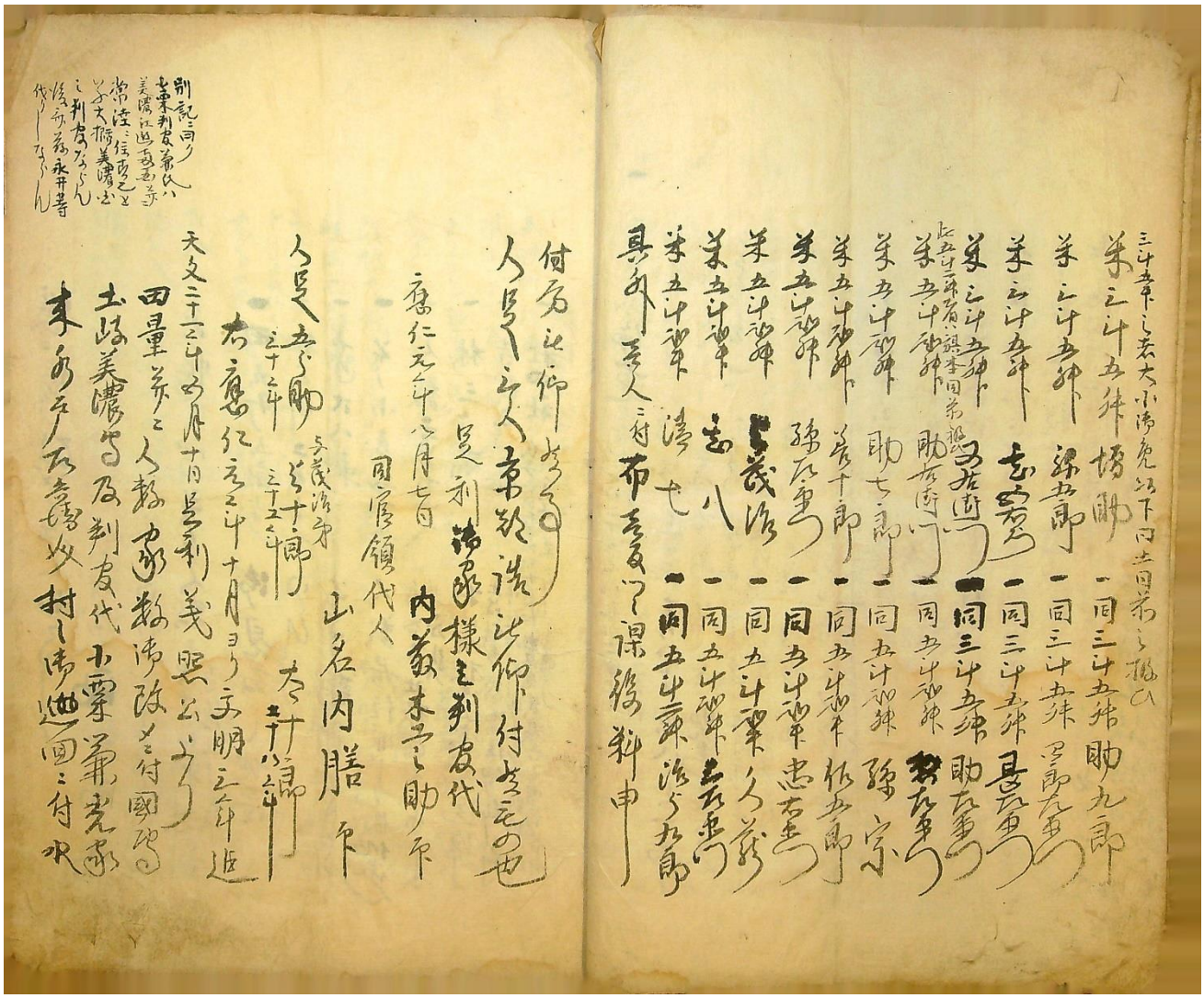
甚五右衛門ハ惣十郎也。

△郷土鷲見氏仮支配

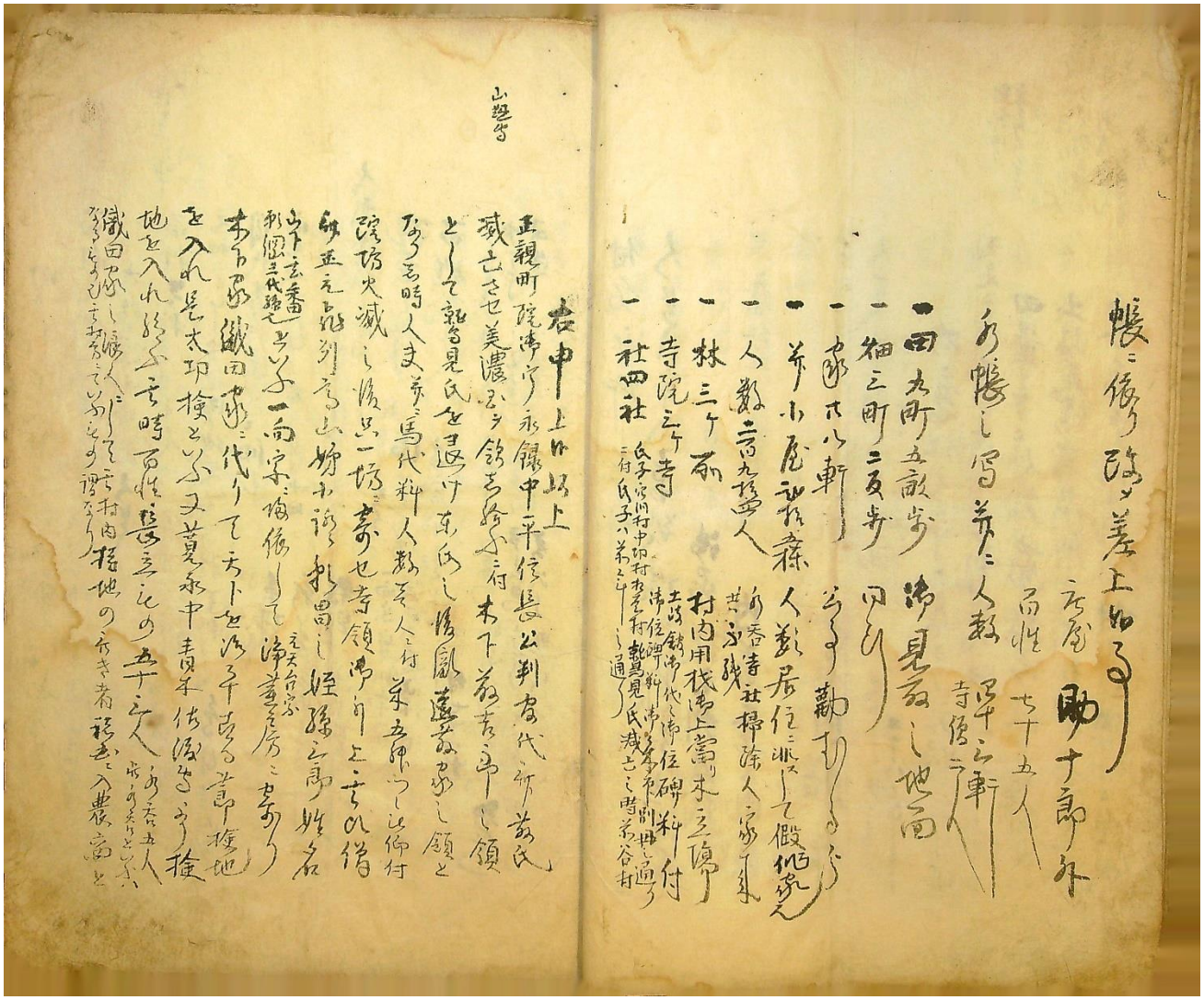
○永井ハ後ニ国司土岐ヲ滅亡成されて自立斎藤ト名く。



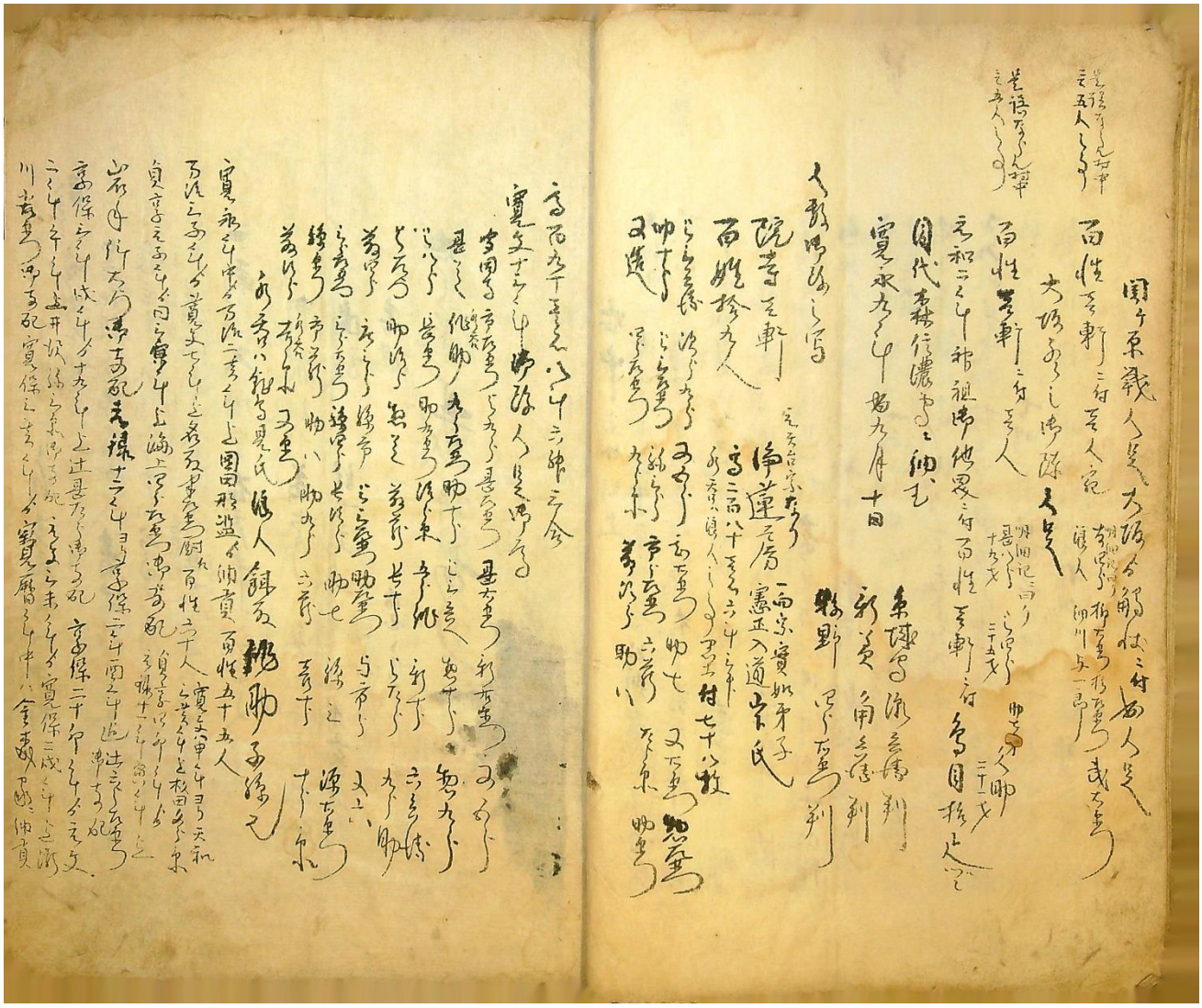
別記に曰ク
小栗判官兼氏ハ
美濃、近江、両国
並ニ常陸ニ住す
也といふ。
大概美濃国の判
官ならん。
後、斎藤・永井等
代りしならん。



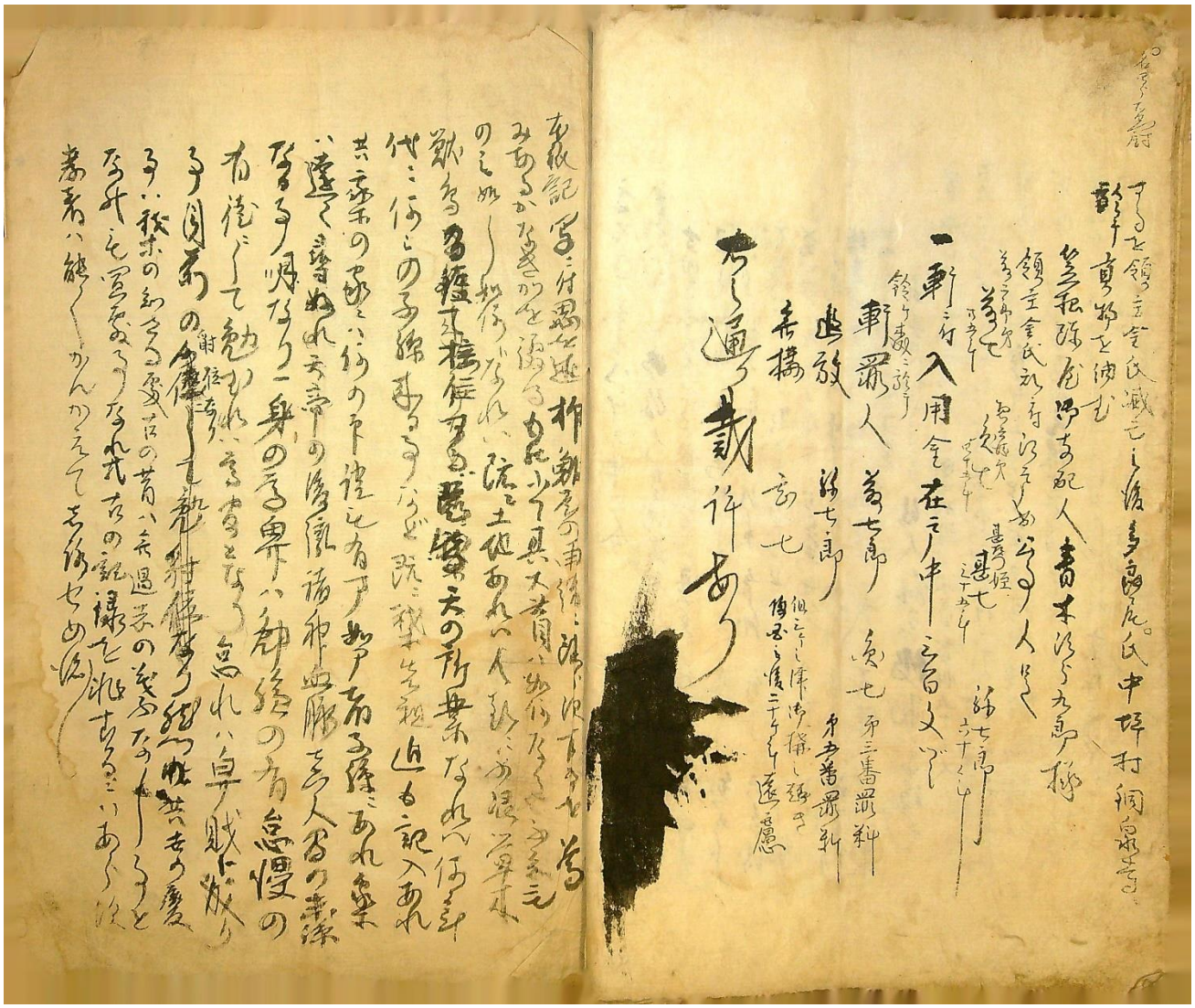
山城守



是誤ならん村中
にて五人の事
是誤ならん村中
にて五人の事



○名四郎
左衛門尉



本紙記写につき、思いを述べながら、鮎走りの由緒に限らずとも、あるを学び、あるかなきかを綴るものにて、その大昔は如何なるや知らずにてのみ如し。如何となれば既に土地あれば人類に限らず草木獣鳥召獲って掎住するは既□。天の所業なれば、何年代何れの子孫来る事など、既に我等先祖迫も記入あれども、我らの家には何の印経もは有りとす如きは、子孫にあれ我等は遠く尋ぬれ。天帝の後胤、諸神血脈一人間の末孫なる事明白なり。一身の高界は勧絶のあり。怠慢のもの徒にして、勉むれば高聞となり、怠れば旱賊となり事、目前の射位なり。然れども世の変事は我等の知らざる所、古の昔は無過志の義なし事となのも宜敷事なれども、古の記録を非するにはあらず。孝者はよくよく考えて志ろせめ□し。